

二〇二五年度 第二回 入学試験問題

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから36ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

本が出たら一番最初にだれに伝えたいですか、と言われたとき、思い出したのは、恋人のゆう子でもなく両親でもなく、ミツザワ書店の、背中のまるいあのおばあさんだった。^①ミツザワ書店のおばあさんですと、しかしぼくは言わず、とりあえず親に、と無難な答えを口にした。

ある文芸雑誌の新人賞に応募したのが去年の春、応募したことすら忘れていた今年の夏、サイシュウセンコウに残りましたと見知らぬ人から電話を受け、サイシュウセンコウが最終選考と漢字変換され意味がようやく飲みこめたその二ヶ月後、受賞が決まりましたとまた見知らぬ人から電話をもらった。

雑誌の編集部に呼び出されて今後のことなどいろいろ打ち合わせをしたのだが、なんだかぜんぜん実感が持てず、授賞式の今日、会場に足を踏み入れて、なんだかとてもないことをしてしまっただんじやないかと思った。

会場はホテルの広間で、人でごった返っていて、ステージがあつて、金屏風があつて、右側にぼくの席が、左側に選考委員たちの席があり、式が始まるといっせいにフラッシュがたかれ、うれしいとかやったとかまったく思えず、とてもないことをしてしまった感はいよいよ強まり、金屏風の前の席で身を縮こませるようにして座り、^②犯罪者のようにうつむいてスピーチをした。式が終わると、ぼくの前に数人の新聞記者がきて、文学についてだとか、受賞についてだとか、経歴についてだとか、難しい言葉で質問された。ミツザワ書店のおばあさんを思い出させた質問をしたのはそのなかのひとりだ。

授賞式のあとは、結婚式で言うところの歓談タイムになって、場内真ん中に設置されたごちそうをみんな食べはじめているのだけれど、ぼくは見知らぬ人たちに取り囲まれて、名刺をもらったり挨拶したりでごちそうに近づける感じがまったくない。

会場に蛍の光が流れはじめ、さっきまでごちそうを食べ会話していた人たちが、徐々に去っていく。編集者に連れられてぼくは二

次会場に向かう。二次会場はこじんまりとした飲み屋で、またもや見知らぬ人たちに囲まれて、ちいさくなってばかりは酒を飲む。いつから小説を書くかと思っていたの？ はじめて小説を書いたのはいつ？ どんな小説を読んできたのか？ などと、見知らぬ人たちから次々と訊かれ、ぼくは赤くなつてうつむき、もごもごと曖昧に答えてばかりいた。そうしながら、やっぱりミツザワ書店を思い出すのだった。

ミツザワ書店はぼくの生まれ育った家の近所にある本屋だ。シャッター街化した商店街にあるごくふつうの本屋であるが、店内は倉庫の如く雑然としていた。レジの前に積み上げられた岸壁のような本の向こうにおばあさんがおり、常に売り物の本を読み耽っていた。何か買い物をした時には、客はおばあさんの読書を中断させるほどの悪さを感じながら声を掛けねばならない。おばあさんの頭の中には店内の膨大な本の配置が全て入っているのだった。

授賞式が終わってしまったと、ぼくの毎日は元の地味な生活に戻った。

新人賞をもらったからといって即作家になれるわけではない。昼間は今までどおり会社にいき、夜、二作目となるべき小説をしこしと書いた。週末はゆう子がきて、テレビを見ながらゆう子の作った料理を食べ、いっしょに眠った。

新人賞の賞金は五十万円だった。二十七歳のぼくにとってそれはものすごい大金に思えたのだが、何を買った記憶もないのに一ヶ月もすると残っていないかった。

仕事から帰ってきて適当な夕食をすませ、コンピュータに向かって物語の切れ端と格闘していると、自分が小説なんてものを書き、新人賞をもらったなんて、ぜんぶ嘘だったんじゃないかと思えてくることがある。あの異様に華やかだった授賞式は、シュールな夢だったんじゃないかとすら思える。だいたい、ぼくに小説なんて似合わない。ちいさな印刷会社で働く会社員というほうが

B 似合っている。二作目なんて書けるはずがないし、

C 書けたとしても、さらにその後コンスタントに小説を書き続

けるなんてできるわけではない。

もうやめちゃおうか、と思う。五十万円を必死に貯めて、出版社の人に返して、新人賞なんかなかったことにして、書きかけの二作目なんか全文削除（さくじょ）してしまおうか。

そんな気分になると、ぼくは自分の小説の載った文芸誌を取りだし、D眺（なが）めてみる。自分の名前やプロフィールを確認（かくにん）してみる。そうすると自動的にミツザワ書店が思い起こされる。薄暗（うすくら）い、本のジャングルみたいなちいさな店と、本の隙間（すきま）から見えるおばあさんの姿。売りもののなに、なめた人差し指でページをめくる。呼びかけても声がちいさいと気づいてもらえない。

ぼんやり浮かび上がる記憶のなかのミツザワ書店内を、子どものころのように眺めまわしていると、なぜか不思議に気持ちが落ちてく。不釣り合い（ふつついあい）ながら自分は確かに小説を書き上げ、賞をもらったのだと、だれかに認めてもらったのだと思えてくる。多作（たさく）でなくてもいい、有名になれなくてもいい、これからずっと小説を書いていこうと思うことができる。

十二月も半ばを過ぎたころ、受賞作が単行本になった。会社の近くの喫茶店（きっさてん）で、編集者がそれをテーブルに載せたとき、ぼくは思わず大声で叫（さけ）びだしそうになった。やった、という気分とはあいかわらずかけ離れた、とんでもないことになってしまった、に果（は）たしく近い気分ではあったけれど、それだけではない、くすぐったいような、笑い出したいような、とにかく叫ばなければおさまりのつかないような心持ちだった。^③しかし叫ぶわけにもいかず、奥歯（おくば）をぎゅっと噛（か）みしめてこらえなければならなかった。

編集者は二作目の進み具合（なみぐあい）を尋ねた。ばつちりです、とぼくは答えた。答えながら心の隅（すみ）で、この正月はミツザワ書店に寄（よ）つてみようかと考えていた。

二十七年間の人生で、一度だけ万引きというものをしたことがある。ミツザワ書店でだ。

あまり寄らなくなっていたミツザワ書店に、母に頼（たの）まれて出かけていった。ぼくは高校生になっていた。おばあさんはあいかわらず、レジ台に積み上げた本の向こうで、何か熱心に読んでいた。一週間ほど前に母が注文した書名を告げると、おばあさんはまた、

あちこちの本をひっくり返しながらかき出し出した。おばあさんは、すでに本屋にあるものならば正確に位置を把握しているのに、定期購読の雑誌や、注文した本は、どこに置いたのかわからないのだった。

夏の終わりだった。夏休みはとうに終わったのにまだ蒸し暑く、店内には、冷房がまわるからからいう音が響いていた。

台に積まれた本の、一番上に目があった。箱入りの分厚い本だった。おばあさんが母の本を捜しているあいだ、何気なくそれを手にとって眺めた。箱から引っぱり出し、目次をめくった。長い小説のようだった。

そのとき、なぜかぼくは、強烈にその本に惹かれた。なぜなのかは未だにわからない。タイトルが魅力的だったせいかもしれないし、目次の言葉が印象的だったからかもしれない。読みたいと思った。というよりも、この本を所有したいと思った。服やCDならまだしも、本に対してそんなふうにするのははじめてだったので、そう思っている自分にびっくりした。

本をひっくり返し値段を見て息をのんだ。一万円近かったからだ。そのころのぼくに買える金額ではなかった。

お待たせ、ありましたよとおばあさんに声をかけられ、ぼくはあわてて本を箱に収め、ハンシヤ的に本を下のほうに隠した。だれかに買われたくなかったからだ。

母に頼まれた本を買い、家に帰っても、その本のこと忘れられなかった。あの本が自分の本棚におさまるところを幾度も想像したりした。一万円を貯めようと思っていた。

次の週、学校帰りにミツザワ書店に寄った。おばあさんはあいかわらず何かの本を熱心に読んでいる。ぼくは店内をブツブツと歩くふりをしてあの本を捜した。

下のほうに隠したはずのその本は、またもや積み上げられた本の一番上に出ていた。だれかが買おうとしているんだとぼくは思った。その本を手に取り、さらに下にさしこんで、逃げるように店を出た。

しかし一万円はなかなか貯まらなかった。母に頼めば、ほしいのは本なのだからひよっとしたらほんと出してくれたかもしれない。けれどなぜか言えなかった。本がほしいなんて、カッコウつけているみたいでとても言えなかった。

学校帰りにミツザワ書店に寄るのが④ニツカのようになった。不思議なことに、隠しても隠してもその本は目につく場所に並べ替えてある。ぼくと似たようなだれかが、やはりミツザワ書店に日参し、下のほうから引っぱり出して眺め、やっぱり値段に手が届かず、ぼんとそのへんに置いて店を出ている、そうとしか思えなかった。

だれかに持っていられるくらいなら、盗んでも自分のものにしたかった。その④せっぱ詰まった気分は、今考えると滑稽でしかないのだが、⑤女の子を好きになるのに似ていた。

そうしてぼくは盗んだのだ。

ミツザワ書店から本を勝手に持っていくのは、そう難しいことではなかった。というより、とことんかんたんだった。店の人はおばあさんしかおらず、防犯カメラなんてシロモノがミツザワ書店にあるはずがなく、おばあさんはいつも本の壁の向こうで本を読み耽っているのだから。もし、日本全国万引きしやすい店ベストテン、なんてものがあつたとしたら、ミツザワ書店は間違いなくぶつちぎりで第一位だ。

また本の塔の表面に出ているその本を、何気ないふりで手にし、手にしたまま店内をぶらつき、なんでもなかったかのように店を出た。おばあさんは一度も顔を上げなかった。店を出てから足がぐくぐく震えだした。ぼくは昔から小心なのだ。震える足で家まで走った。夏はすでに去り、空気はずいぶん冷えていたのに、脇の下は汗でびっしり濡れていた。本を握りしめた手が、やっぱり汗でぬるぬるしていた。本を母に見られないようにして、⑥イチモクサンに自分の部屋に向かった。

制服を着替えもせず、盗んだ本を開いた。読みはじめてすぐに引きこまれた。夕食よ、と母から声をかけられても聞こえなかったくらいだ。食事をしているあいだも、続きを読みたくて仕方なかった。猛スピードで風呂に入り、部屋に戻って本を開いた。盗んだことなんてすっかり忘れていた。

気がついたら、空が白んでいた。すげえ。静まり返った部屋で、ぼくはそれだけつぶやいた。それしか言葉が思いつかなかった。すげえ。すげえ。すげえ。その言葉ばかりくりかえした。自分はほんものの阿呆だなど、すげえとくりかえしながら知った。この本

にはこれだけの言葉があふれているのに、それをぼくは、すげえという一言でしか言いあらわせないのだから。

明くる日はほとんど徹夜^{てつや}状態で学校にいった。頭のなかは、読んだばかりの本の言葉があふれかえっていた。しかしそのどれも、だれかが書いた言葉であって、ぼく自身の言葉というのは、あいかわらず、阿呆な一言しかなかった。

その日はミツザワ書店を避^さけて、遠まわりして帰った。

以来、母親に買ひものを頼まれてもミツザワ書店へは決して近づかなかった。そのまま十八歳になり、進学のため都心に出て、正月に帰省しても、もちろんミツザワ書店にはいつていない。盗^{ぬす}んだ本は、ずっとぼくの本棚におさまり続けている。

自分にはとうてい不釣り合いな、小説というものを書いてみようと思ったのは、一昨年の暮れだ。なぜなのか、うまく説明できない。ただ、ずっとぼくのなかに、あのときの気分が残っていたのはたしかだ。この本にはこれだけの言葉があふれているのに、それはすべて他人の言葉で、ぼく自身の言葉といったら、何も言っていないに等しい幼稚^{ようち}な一言でしかない、というような気分。自分の言葉で、自分自身の言葉だけで、何かを言えないものか。拙^{つたな}くてもいい、饒舌^{じょうぜつ}でなくともいい、何か、何かないか。自分の言葉を捜すようにぼくは文字を書き連ね続けた。

年末も新年も帰省せず、アパートに閉じこもって、書いては消し、書いては消し、まるで水に映った月を掬^{すく}うようにして書き続け、三ヶ月半の後、ぼくの言葉はまとまった枚数になった。それが小説といえるのかいえないのかさえもわからないほど、ぼくは小説というものを知らなかった。せつかくこれだけ書いたんだから、という貧乏根性^{びんぼうこんじょう}だけで応募したのだった。

新しい年になって三日目、朝から続々と親戚^{しんせき}が詰めかける実家を抜け出して、ぼくはミツザワ書店に向かった。財布^{さいふ}には盗んだ本の代金を入れ、手にした茶封筒^{ちやふうとう}には自分の本を入れて。

十六歳のあの日以来避け続けていたから、ミツザワ書店のある商店街を歩くのは十一年ぶりだった。実家の近辺もそうだが、あの

ころと比べて商店街もずいぶん様変わりした。新築マンションが増え、商店街も少しは盛り返したのか、まだ三が日だというのに閉まっているシャッターは少ない。貸しビデオ屋もコンビニエンスストアもファミリーレストランもある。チェーンの居酒屋も、ゲームショップもあった。かといって、にぎわっているかと言えばそうでもなく、なぜかがんとした雰囲気は変わらず漂っている。

正月の空は高く、澄んでいる。子どもたちが薄い影を引きずりながら、ゲームショップに駆けこんでいく。煎餅屋は携帯ショップに変わっていた。肉屋は以前と同じ位置にあったが閉まっていた。

ミツザワ書店が近くに連れどきどきしてくる。シャッターがあいかわらず閉まっているまごころ洋裁店を過ぎ、ハートクリーニングを過ぎ、店先にがちゃがちゃを並べた駄菓子屋を過ぎ、やがてミツザワ書店の看板が見えてくる。すすけて色あせた、黄色地に赤い文字。ああ、あった。なくなっていなかった。自分でも驚くほど安堵していた。

以前とまったく同じ場所にあるミツザワ書店は、シャッターが閉まっていた。そういえば、シャッターの閉ざされたミツザワ書店をぼくは見たことがなかった。ほとんど眠ったような商店街だったが、ミツザワ書店はいつだって開いていたのだ。

三が日だからか。明日には開店するのか。黒ずんだシャッターの前に立ち、ぼくは考えを巡らせる。着物姿の女の子たちがぼくの背後を通りすぎていく。彼女たちの手にした破魔矢の鈴が、ちりちりと鳴る。

東京に帰るのは明日の午後だから、明日の朝にまたきてみようか、そう思う一方で、今帰ったらもう二度とここへくる気にはなれないような気もした。

ずいぶん長いあいだぼくはそこに立ち尽くしていたが、思いきって店の裏側にまわった。店の裏側が住居になっていることは前々から知っていた。店の裏手の門についたインターホンを鳴らしてみる。十歳かそこらのころ、E ような高揚と緊張を覚える。

返答はない。もう一度押す。門の内側の申し訳程度の庭を、かつてミツザワ書店の店内を眺めたように見渡した。実際庭はちいさな書店内と同じく、雑然としていた。雑草が生い茂り、白いちいさな花が咲き、細いぐみの木や、背の高い柿の木が好き勝手にのび

ていた。

ドアがゆっくりと開き、ぼくはあわてて視線を戻す。てっきりあのおばあさんがあらわれると思っていたのだが、ドアから顔をのぞかせているのはずいぶん若い女の人だった。怪訝けげんそうな目でぼくを見ている。

「あ、あの、以前こちらでよく買いものをしていた者なんですが」ぼくは急いで自己紹介じこしょうかいをした。「ひさしぶりに帰ってきたので寄ってみましたですが、閉まっていたので」

それを聞くと女の人は、口元にゆったりした笑みを浮かべ、ドアから出てきて門を開いた。どうぞ、と手招きをする。

「いえ、あの、すみません、新年にご迷惑めいわくかと思っただけですけど、明日帰ってしまうもので」

「どうぞ、おあがりになつて」

女の人はほくに笑いかけた。背を丸めて本を読んでいたおばあさんが笑ったところは見たことがないけれど、笑いかけられ、この人がおばあさんの娘むすめか孫だということがすぐにわかった。どこかなつかしいその笑顔えがおに誘さそわれるように、ぼくは玄関へ続く庭へと足を踏み出していった。

こぢんまりとした居間に通され、ぼくはソファに腰掛こしかけた。ミツザワ書店とは違い、こざっぱりした部屋だった。陽のさしこむ窓に目をやると、埃ほこりがゆっくり舞うのがやけにはつきり見えた。女の人は盆ぼんに紅茶をのせて、ぼくの向かいに腰掛こしかける。

「突然とつぜんすみません」

もごもごとはくは言った。女の人はぼくの前に紅茶を置く。香ばしいにおいがたちのぼる。

「あの、えーと、おばあさんはお元気ですか」

女の人は口元に笑みを浮かべたままぼくを見て、

「他界しました。去年の春です」静かな口調で言った。

F

ような気持ちでぼくは女の人を見た。そういえば、玄関になんの

飾りもなかったことを今さらながら思い出す。

「家の者は友人の家にいつていて、ちょうど今日は留守で、私もひまだったんですよ」

「えーと、あなたは、おばあさんの」

「孫です。三年前にここに引っ越してきて、この家で両親と暮らしています」

「それであの、ミツザワ書店は」

「祖母が伏せてから、ずっと閉めています。あとを継ぎたいという者がだれもいなくて。もともと儲かるような店じゃなかったし、祖母の道楽みたいなものでしたしね。今は駅の向こうに大型書店もできて、うちが店じまいしてもみなさん困ることもないでしょう」

何か、とてつもない失敗をしでかしたような気になった。 G ような。柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた。

「じつはお詫びしなきゃならないことがあって今日はここまで来たんです」

ぼくはうつむいたまま一気にしゃべった。十六歳の夏の日。秋のはじめの決行。はじめて本読みで夜を明かしたこと。拙い感想。三年前書きはじめた原稿。幾度も書きなおした言葉。とんでもないことになったと思った授賞式。夜襲いかかってくる不安。単行本と、それを手にして思い出したおばあさんのこと。

「本当にすみませんでした」

ぼくは財布から本の代金を取り出してソファテーブルに置き、深く頭を下げた。呆れられるか、ののしられるか、帰れと言われるか、じつと待っていると、子どものような笑い声が聞こえてきた。驚いて顔を上げると、女の人は腰をおりまげて笑っていた。ひとしきり笑ったあとで、話し出した。

「じつはね、あなただけじゃないの。この町に住んでいた子どもの何人かは、うちから本を持ってつてると思うわよ。祖母の具合が悪くなって、それで私たち、同居するために引っ越してきたんだけど、はじめてあの店を見て、私だって驚いちゃった。持ってた

泥棒^{どろぼう}って言うような本屋じゃない。しかも祖母はずうっと本を読んでるし。私も幾度か店番をしたことがあって、何人か、つかまえたのよ、本泥棒」女の人はまた笑い出した。「それだけじゃないの。返しにくる人も見つけたことあるの。持っていったものの、読み終えて気がとがめて、返しにきたんでしょね。まったく、図書館じゃあるまいし。こうしてお金を持って訪ねてきてくれた人も、あなただけじゃないの。祖母が生きているあいだも、何人かいたわ。じつは数年前、これこれこういう本を盗んでしまった、つて。もちろん、そんな人ばかりじゃないだろうけどね、そんな人がいたのもたしかよ。あなたみたいにね」それから女の人はふとぼくを見て、

「作家になった人というのははじめてだけれど」と思いついたようにつけ足した。

「本当にすみません」もう一度頭を下げると、

⑦「見ますか、ミツザワ書店」女の人は立ち上がって手招きをした。

玄関から続く廊下^{ろうか}の突き当たりが、店と続いているらしかった。女の人は塗装^{とそう}の剥げ^はた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃^{あま}っぽいような、甘い菓子^{かし}のようなにおいがぼくを包みこみ、目の前に、あのなつかしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片づけるのも処分するの^{めんどう}も面倒だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫です
すね」

女の人とともに、店内に足を踏み入れた。床^{ゆか}から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁を作る本、棚にぎゅうぎゅうに押しこまれた本――。記憶と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光がさしこんでいた薄暗いミツザワ書店は、今、蛍光灯^{けいとうとう}ののっぺりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人だね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読んでもましたよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのことあれば、時代小説のこともあったし、あるとき私がのぞきこんだら、UFOは本当に存在

するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由についていうのも、祖父が本屋の跡取り息子だったからなんですって。祖父が亡くなつてからは、自分の読みたい本ばかり注文して、片っ端から読んで。売り物なのにね」

⑧ 女の人は積み上げられた本の表紙を、そつと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどこがそんなにおもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてってくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へもいったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれないですよ」

それを言うなら子どものころのぼくにとって、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとぼくは思ってたけれど、口には出さなかった。そのかわり、棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそつと置いた。「おばあちゃんは本屋じゃなくて図書館で働くべきだったわね」

「でも、それじゃ、すぐクビになっちゃいますよ。仕事を放り出して本を読み耽つちやうんだから」思わず言うと、女の人はまだ楽しそうに笑った。

本で満たされた店内をぼくはもう一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸いこみ、吐き出し、だれかに読まれるのをじつと待っているかのように。そのなかに混じったぼくの本は、いかにも新参者という風情で、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事をはじめたばかりのぼくのように。

礼を言つて玄関を出た。門まで見送りにきた女の方は、恥ずかしそうにうつむいて、

「いつかあそこを開放したいと思ってるんです」とちいさな声で言った。「図書館なんて」^⑨ おこがましいけれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持つていって、気が向いたら返してくれるような、そういう場所を作れたらいいなって思っているんですよ」「そうやってほしいと、じつはさっき思っていたんです。楽しみにしています」ぼくは言った。

「今日はどうもありがとうございました」女の人は頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございました」

「そうじゃなくて。本、お買いあげただいて」

女の人はおかしように笑った。ついさっきぼくが出した本の代金のことを言っているのだと、わかるのに数秒かかった。すみませんと頭を下げて、ぼくも笑った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いてふりむくと、記憶のなかのミツザワ書店が色鮮やかに思い浮かんだ。店の前に並べられた週刊誌や漫画、埃で曇った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるんだろう。⑩ 世界に通じるちいさな扉は、近々きつと開くのだろうか。

不釣り合いでも、煮詰まっても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書く、ミツザワ書店の棚の一部を占めるくらい的小説を書く、書き初めに向かう子どものような気分で思う。

顔を上げると、青い空に風がひとつ浮かんでいた。

【問1】

〓 a) e) のカタカナを漢字に改めなさい (楷書で、ていねいに書くこと)。

- a) ハンシヤ b) ブツシヨク c) カツコウ d) ニツカ e) イチモクサン

【問2】

―― ①「ミツザワ書店のおばあさんですと、しかしぼくは言わず、とりあえず親に、と無難な答えを口にした」とありますが、ここでの「ぼく」の様子について説明したものととして、次の中から最も適当なものを選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) あたりさわりのない返事をするので、ひとまずこの場をやり過ごそうとしている。
 (イ) 大切な場所だったミツザワ書店が今はもうないという事実、改めて心を痛めている。
 (ウ) 多くの人が集う晴れの場で、故人を話題にすることはふさわしくないと考えている。
 (エ) ミツザワ書店に注目が集まることで、今後気軽に立ち寄れなくなることを恐れている。

【問3】

―― ②「犯罪者のようにうつむいてスピーチをした」とありますが、ここでの「ぼく」の様子を言い表したものととして、次の中から最も適当なものを選び、(ア) (イ) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 顔と名が世間に公表されることで、秘密にしたい過去がひろく知られてしまうのも時間の問題であると恐れている。
 (イ) 初めて経験するホテルでの授賞式に浮き足立ってしまい、用意してきたものとはまったく違うスピーチをしている。
 (ウ) 華やかな席で新人賞受賞の榮譽に浸りたいところだが、終始カメラに囲まれていることに苛立ちを隠せないでいる。
 (エ) 本来光栄な場であるはずなのに、自分にスポットがあたって戸惑うばかりか、居たたまれない思いまで抱いている。

【問4】

〔A〕〔D〕に当てはまる語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、(ア)〔(カ)の記号で答えなさい。ただし、

同じ記号は2度以上用いてはいけません。

(ア) よほど (イ) ほとんど (ウ) だんだんと

(エ) よもや (オ) めったに (カ) こっそりと

【問5】

—— ③「しかし叫ぶわけにもいかず、奥歯をぎゅっと噛みしめてこらえなければならなかった」とありますが、ここからうかがえる「ぼく」の様子について説明した次の文章を読んで、〔a〕〔d〕に当てはまるものを選び、それぞれ

(ア)〔(カ)の記号で答えなさい。

新人賞を受賞した「ぼく」は〔a〕でしたが、はじめて自らの仕事の成果である単行本を手にして、相変わらず授賞式の時の思いを引きずってはいるものの、〔b〕を得ています。その一方で、なんとか〔c〕も感じられます。その後「ぼく」は編集者に対し、「ばっちりです」と答えます。ここからは、これまでとは変わって小説家として歩んでいくことを〔d〕が見て取れるのです。

(ア) 自覚的に選び取る姿勢 (イ) 身みの丈たけに合わない考え (ウ) 浮き足立つばかりの内面

(エ) 平静を保とうとする一面 (オ) 現実感をもてない様子 (カ) 実感のこもった強い喜び

【問6】

—— ④「せっっぱ詰まった」、⑨「おこがましい」とありますが、これらの意味として適当なものを次の中からそれぞれ選び、(ア) ～ (オ) の記号で答えなさい。

- (ア) 品が良く言葉や行いが控えめであること。
- (イ) 対立して、たがいに負けないよう争うこと。
- (ウ) 物事が差し迫ってどうにもならなくなること。
- (エ) 寝ても覚めてもそればかり考えてしまうこと。
- (オ) 身の程をわきまえないようで気恥ずかしいこと。

【問7】

—— ⑤「女の子を好きになるのに似ていた」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、

(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) どういうわけかその本のことしか考えられなくなってしまう、何としても手に入れないとおさまらない思いに駆られていた、ということ。
- (イ) 自分なりに必死に手に入れる方法を考えていたけれども、いつしか手に入れること自体が目的となって執着心が生まれていた、ということ。
- (ウ) 到底自分には手が届かない本であると分かっているからこそ、かえって欲しい気持ちを抑えることができなくなってしまう、ということ。
- (エ) 実像について何も分かっていないにもかかわらず、わずかな情報をつなぎ合わせることで自分勝手な想像をふくらませていた、ということ。

【問8】

——⑥「盗んだ本は、ずっとぼくの本棚におさまり続けている」とありますが、どういふことですか。次の説明文を読んで、(1)～(4)について適当なものを選ぴ、それぞれ記号で答えなさい。

「ぼく」にとって「盗んだ本」とはどのようなものだったのか、振り返って考えてみましょう。

高校生だった「ぼく」はミツザワ書店で強烈に心惹かれる本に出会い、その本を盗んでしまいます。

「ぼく」は(1)

- (ア) あまりにも簡単に盗めてしまったことに拍子抜けする
- (イ) 生まれて初めて万引きをしてしまったことに動揺する
- (ウ) おばさんに対して申し訳ないことをしたと後悔する

一方で、

(2)

- (エ) ようやく手に入れた本を一刻も早く読み始めたいという一心
- (オ) 今日のうちに最後まで読み切らねばならないという強迫観念
- (カ) 汗ばんだ手によって本が傷んでしまうのではないかという不安

から家まで急ぎ、自分の

部屋に駆け込みました。本を開くとその世界にすっかり没入してしまうのでした。この本を読んで「ぼく」は

(3)

- (キ) その感動をとばしい言葉でしか表現できない自分の不甲斐なさ
- (ク) 万引きすることでこの本を手に入れてしまった自分の情けなさ
- (ケ) こんな本をなにげなく店頭に置いているミツザワ書店のすごさ

を痛感したのです。

この経験は(4)

- (コ) 自分の言葉で何か書いていきたい
- (サ) 自分も世間から高く評価されたい
- (シ) 自分をおとしめることをやめたい

という思いを「ぼく」にもたらしたようです。

そんな一冊であるからこそ、今もその本は「ぼく」の本棚におさまり続けているのでしょうか。

【問9】

E

G

に当てはまる言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選び、(ア) (カ) の記号で答えなさい。

(ア) 頬ほおをはられた

(イ) 頭をなでられた

(ウ) 今日の晩ご飯が大好物の唐揚げからあげだと分かった

(エ) 住宅街をピンポンダッシュして走りまわった

(オ) やつと手に入れたレアなカードを先生に取り上げられた

(カ) 自分は凶悪事件きようあくの加害者で、警察にいかず被害者ひがいしゃの家に自首しにきた

【問10】

⑦ 『見ますか、ミツザワ書店』 女の人は立ち上がって手招きをした」とありますが、なぜですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 店を取り壊とこわしてしまう前に、祖母が「ぼく」に渡わたそうとしていた本を見てもらいたいと考えたから。

(イ) ミツザワ書店について語る様子から、「ぼく」がお店に特別な思いをもっているらしいと考えたから。

(ウ) 本を返しに来るような人ならば、ミツザワ書店に多少の支援しえんをしてくれるかもしれないと考えたから。

(エ) 祖母に対する謝罪であるならば、居間ではなくミツザワ書店でこそ行われるべきであると考えたから。

【問11】

——⑧「女の人は積み上げられた本の表紙を、そつと撫^なでさすりながら言葉をつなぐ」とありますが、ここでの「女の人」の様子の説明として、最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) すっかり色あせている本を前にして、祖母の思いを生前に理解できなかったことを悔^くやんでいる様子。
- (イ) 過ぎ去った時を確かめ、ミツザワ書店を閉じたのはやむを得なかったと自らに言い聞かせている様子。
- (ウ) かつて祖母が手にしたはずの本に触^ふれながら語ること、その思い出を改めて愛^{いと}おしんでいる様子。
- (エ) 家族との時間よりも読書の楽しみを優先していた祖母を思い出して、複雑な思いを抱いている様子。

【問12】

——⑩「世界に通じるちいさな扉は、近々きつと開くのだろうから」とありますが、どういうことですか。これに関する次の説明文を読んで、a～dに当てはまるものを選び、それぞれ(ア)～(ク)の記号で答えなさい。

「ぼく」は、十数年ぶりにミツザワ書店に足を踏み入れます。記憶のままの店舗^{てんぽ}の中で、孫の女性から、おばあさんと本との関わりについて話を聞くことになるのです。

おばあさんにとって、本を読むことは、a だったのではないかと語る女性の言葉を聞き、「ぼく」は店の中に積まれた本の上に、自分の単行本をそつと置きます。女性には内緒^{こひ}で。この行為^{こうい}を通して「ぼく」は、b を得ているようです。

孫の女性は、ミツザワ書店をいつか図書館のように解放したい、と語っています。それは、c からのことだったのでしょう。「そうなってほしい」と、「ぼく」も答えています。

店を後にし、昔のままの姿でミツザワ書店が開いている光景を想像した「ぼく」は、d を新たにしています。それは、ミツザワ書店とそこに並ぶ本たちが、世界に通じる扉に他ならないと感じたからでしょう。その本棚の

一角を占めるような作品を生み出す作家となつていこうとする「ぼく」の思いを、ここからは読み取ることができる。

今、全国で書店の閉店が相次いでいます。とりわけ小規模の個人経営店が数を減らしており、全国の4分の1以上の自治体で書店が存在しないといえます。立ち並ぶ本棚をゆつくりと眺めることで思いがけない一冊に出会い、新しい世界の扉となつていたミツザワ書店も一旦は店を閉じざるを得ませんでした。しかし、孫の女性は図書館のような形でミツザワ書店を復活させようと言っていました。町の人々にとつてミツザワ書店は新たな世界の扉となることでしょう。皆さんも、ミツザワ書店のように、あなたとの出会いを待つ無数の本を揃えた、世界に通じる扉となる書店や図書館に実際に足を運んでみてはいかがでしょうか。

- (ア) 自分がこの書店を背負っていくという実感
- (イ) 自分の知らなかった世界への扉を開くこと
- (ウ) どこにも行けない寂しさを埋めてくれるもの
- (エ) どんな形でも小説を書いていこうという決意
- (オ) 世界への扉について描かれた本を集めたいという思い
- (カ) 自分の本がミツザワ書店の一員となることへの深い喜び
- (キ) 新しい時代に合わせてミツザワ書店を変えようとする熱意
- (ク) 本に対するおばあさんの思いを受け継いでいきたいという考え

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

そもそも、「国語」とは何なのでしょう？

国語はどうして「国語」って言うのでしょうか。どうして国語の授業では、現代文だけでなく古文や漢文も勉強したりするのでしょう。いったいどこからどこまでが「国語」なのか、そしてその外側には何があるのか。^①大きく見取り図を描いてみることにいたしましょう。

「国語」とは読んで字のごとく「国の言葉」という意味ですよね。そこで実際にどんなことを勉強しているかというと、日本語で書かれた文章を読んだり書いたり、話したり聞いたりしています。基本的に日本の国内で使われるのは日本語ですから、日本語の読み書きを学ぶ教科が「国語」と呼ばれていても、特に不思議とは思えない人が多いかもしれませんね。わたし自身、小学校の頃ころから「国語」という教科が好きで、教科書の文章を読むのも好きでしたが、^②その表紙にある「国語」というタイトルを疑ったことはありませんでした。

しかし、たとえばアメリカやイギリスでは、日本の「国語」にあたる教科は「English」といいます。「National Language」ではありません。「好きな科目は国語です」とアメリカに住む中学生が英語で言うとしたら、「My favorite subject is English」となるでしょう。そして、同じことを日本の学校に通う中学生が英語で言うなら、「My favorite subject is Japanese」になるはずです。「Japanese」すなわち「日本語」ということです。どうして、日本では教科の名前が「日本語」ではなく「国語」なのでしょう。

かつて、中学一年生の英語の時間に「国語は Japanese なのか!」と知って驚いたひとりの女の子がいました。彼女の名前は、温又柔。日本語では「おん・ゆうじゅう」と読みます。台湾人たいわんじんの両親とともに、三歳になるかならないかという頃ころから日本で暮らしていました。中国語では「ウェン・ヨウロウ」という音の名前を持つ彼女の驚きは、ここで終わりました。

(それじゃあ、わたしがずっと台湾で育っていたら、わたしの国語は Japanese ではなく、Chinese だったということか……)

(温又柔『国語』から旅立って)

のちに小説家となった彼女は、『国語』から旅立って』という本の中でこの体験を語っています。台湾(中華民国)のパスポートを持って、日記帳には日本語をつづり、家では両親の中国語と台湾語が入り交じった言葉を聞く。台湾では福建省の辺りの言葉にルーツを持つ台湾語を多くの人が話しますが、「國語 guóyǔ」(台湾も「国語」なんですね)として学校で教わるのは北京の言葉をベースにした中国語です。日本に暮らして日本の学校に通った温さんは、日本語が一番得意な言葉になりましたが、台湾に育って台湾の学校に通っていたら、中国語で小説を書く人になっていたかもしれません。

日本語が得意な現実の温さんと、中国語を話していたかもしれない可能性としての温さん。そのふたつの道を分けたのはほんの偶然にすぎません。たまたま暮らした環境がどのようなものだったかで、習得する言語は変わります。それは家族とすら違うことがあります。国籍が決まっているからといって、その国の言葉が自分の言葉になるとは限らないのです。

つまり、こういうことです。

A

英語の時間の出来事は、温さんが大人になってから向き合うことになる「国語とは何か」「国家とは何か」「国民とは誰か」という問いの端っこに触れた出来事でした。

もう一つ、一五〇年ほど前にフランス語で書かれた物語からこの問題を考えてみましょう。

少し前まで日本の国語教科書にも載っていた「最後の授業」という短編小説をご存じでしょうか。今でも子ども向けの本として出ているので読んだことのある人もいるかもしれませんが、簡単にあらすじをご紹介します。こんなお話です。

舞台は十九世紀後半、フランスとドイツの国境地帯であるアルザス地方のある村。フランス少年は、学校に行ってびっくり。いつもの教室の後ろに村中の大人たちが詰めかけています。聞くと、今日がフランス語のアメル先生の最後の授業だということです。なぜなら、フランス少年たちの住む村は、フランスがプロシア（ドイツ）に戦争で負けたために、今度からドイツのものになり、学校ではドイツ語しか教えてはいけなくなったからです。アメル先生はこれが最後になる授業で、フランス語がいかにすばらしい言語か、自分たちの言葉を守ることがどれだけ大切かを説きます。

それから、アメル先生は、フランス語について、つぎからつぎへと話を始めた。フランス語は世界じゅうでいちばん美しい、いちばんはつきりした、いちばん力強い言葉であることや、ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりには、そのろう獄のかぎを握っているようなものだから、私たちのあいだでフランス語をよく守って、決して忘れてはならないことを話した。

（アルフォンス・ドーデー／桜田佐訳「最後の授業」）

教室の村人たちも、アメル先生の授業を真剣に聞きました。そして十二時の鐘がなると同時に、プロシア兵のラッパが窓の下で鳴り響きます。アメル先生は最後に黒板に「フランスばんざい！」と大きな字で書き、最後の授業を終えるのでした。

感動的なお話ですね。「ろう獄のかぎを握っている」ということは、たとえ囚われの身となり自由を奪われても、自分で自分を解放できるということです。つまり、人間の自由を保障するのは「国語」だということ。自分の言葉を大切にしようという力強いメッセージは、国語の教科書にぴったりと思われたのでしょうか。このお話は、戦前から戦後にかけて多くの教科書に載っていました。ところがある時期、具体的には一九八六年以降、ぱったりと教科書に載らなくなりました。いったい何があったのでしょうか。

一つの要因と考えられるのが、一九七〇年代の終わりから一九八〇年代の初めにかけてこの作品に対して提出された、いくつかの厳しい批判です。

小説の舞台となったアルザス地方は、ドイツとフランスの間にあって、戦争のたびごとに国境線が変わり、ドイツ領になったりフランス領になったりしていた場所です（ちなみに現在はフランス領です）。それで、この地域の土着の言語（アルザス語）は、フランス語よりもむしろドイツ語に近いのです。たとえば「小さい」という意味の単語はアルザス語で「Klän」といいます。ドイツ語では「klein」ですから、よく似ています。一方、フランス語は「petit」です。全く違いますね。アルザス語で育った人たちにとって、フランス語はドイツ語よりも遠く、努力しなければ身につかないものだったでしょう。

つまり、アメル先生はフランス少年たちに自分たちの言葉を守ることが大切だと説きましたが、^③ 実はアメル先生こそが、アルザスの人たちに自分たちの言葉（アルザス語）とは違う言葉（フランス語）を押しつける立場だったのです。

その証拠に、アメル先生は次のように言います。

ああ！ いつも勉強を翌日に延ばすのがアルザスの大きな不幸でした。今あのドイツ人たちにこう言われても仕方がありません。どうしたんだ、君たちはフランス人だと言いはっていた。それなのに自分の言葉話すことも書くこともできないのか！……

この「自分の言葉話すことも書くこともできないのか」というアメル先生のセリフは、うっかりしていると「読むことも書くこともできないのか」と頭の中で勝手に直して読んでしまうかもしれません。子ども向けの本の中にはそのように改変されているものもあります。しかし原文でははっきり「parler」（話す）という単語が使われています。生まれ育った自分の言葉なら、読み書きできないことはあっても、「話すことができない」なんてことはありません。しかし、アルザスの人たちにとってフランス語は勉強しなくては話すことのできない言葉だったのです。^④ はたしてそれを「自分の言葉」と言えるのでしょうか。

この「最後の授業」という作品は、アルフォンス・ドーデーという人が書いてパリの新聞に載せたものです。戦争に負けてアルザスを失うことになったフランス人、とりわけパリの市民に向けて、愛国心や感傷をかきたてるような書き方をしているわけです。で

も、実際にアルザスの人たちはどう感じていたのでしょうか。フランス語を習えなくなること「自分の言葉が奪われる」と感じる人はどれぐらいいたでしょうか。

こんなふうに、「最後の授業」は複雑な背景がある中で、かなり政治的な意図をもって書かれている作品なのですが、「それを単純にいい話みたいにして教科書に載せていいの？」というのが批判のポイントでした。田中克彦という社会言語学者は、著書『ことばと国家』の中で「背景をよく考えてみると、「最後の授業」は、言語的支配の独善をさらけ出した、文学などとは関係のない、植民者の政治的煽情の一篇でしかない」とまで書きました。かなり厳しい批判ですね。そして、このような批判がいくつか続いた結果、かつてはどの会社の教科書にも載っているような定番教材だったのに、一九八五年度を最後に、ぱったりと採用されなくなっていました。

この「最後の授業」とその批判からも、国家の言葉と個人の言葉は違うということがわかります。その場所を支配する国が変われば、公的に使われる国語が一日にして変わってしまうこともあります。しかし、小さい頃から覚えてきた、それによって生きている自分の言葉が、**B**に入れ替わるなんてことはありません。

小さい頃から覚えてきた自分にとって一番親しい言語（フランス少年にとってのアルザス語）のことを、「第一言語」とか「母語」とかいいます。母語とは生まれて最初に覚える言語のことですが、学びとる相手はもちろん母親に限らず父親やほかの養育者であってもかまいません。また、「母語」や「第一言語」と呼べる言語が複数ある場合もあります。

人間を自由に解き放つ「ろう獄のかぎ」になる言葉というのは、本来はまずこのような母語のことだと思っています。わたしたちが世界を認識し、思考するのを支えてくれるものだからです。

これに対して、国家の言葉は、公文書や学校教育など、その国で公式に用いられる言語です。ふつう国民の多くが話す言語が採用されます。言語と民族と国家がイコールで結ばれるというのが近代の国民国家の典型的なイメージでした。

C

、国内に異なる言語を話すグループが複数ある場合は、一つの国で公用語が複数定められる場合もあります。

D

カ

ナダは英語とフランス語、ベルギーはオランダ語・フランス語・ドイツ語が公用語になっています。

E、すべての人の母語が国語に採用されるとは限りません。国家の言葉が自分の母語と異なる言語である場合、国語を身につけて使いこなすのはそれなりに苦勞をすることになります。「どうせ苦勞するのなら、はじめから公式に通用する言葉だけ使えればいい」と考えて、小さい頃に親から習い覚えた言葉を使わなくなってしまうこともあります。**F**、少数言語の話し手はだんだん減っていき、ついには言語が消滅する危機を迎えることにもなります。

(中略)

わたしたちが「国語」として学ぶのは現代日本語だけではありません。「古典」すなわち古文・漢文も学びます。古文は古い日本語であるからまだしも、漢文は古い中国語です。なぜ、「国語」として勉強する必要があるのでしょうか。

明治時代に国家による学校教育が始まって以来、「国語」(当初は「国語及漢文」^{および})という教科の中では古文・漢文が教えられてきました。しかし、「中学校教授要目」などを見ると、明治の初めの頃の古文・漢文を学ぶ理由は、今とは少し違ったようでした。

明治時代前半は、まだ「言文一致」^{いっち}の試行錯誤^{しこうくわく}の真っ最中。当時の書き言葉といえば文語文でした。文語文というのは、みなさんが学校で習ういわゆる「古典文法」にのっとって書かれた文章のことです。ですから、日常的な読み書きにおいて古文との接点を持たない現在のわたしたちと異なり、当時の人たちにとっては、古文は書き言葉を学ぶ際に直接お手本になり得るものでした。

平安時代頃^{きよのころ}に遡れば、書き言葉と話し言葉はそれほど違うものではありませんでした。鎌倉時代^{かまくら}、室町時代^{むろまち}、江戸時代^{えど}と時代をくだるにつれて、話し言葉はどんどん変化していくのに対して、書き言葉はそれほど変わりません。明治時代になる頃には、両者の距離^{きょり}は非常に大きくなっていました。それをどうやって一致させるか、どうすれば話すように書くことができるか、と模索^{もさく}していたのが「言文一致」の運動です。そして、^⑤話し言葉に書き言葉を近づけた結果、今のわたしたちは古文との接点を失ってしまったとい

うわけです。

ただし、書き言葉は話し言葉ほど大きく変わらなかったとはいえ、実は鎌倉時代頃に重要な変化がありました。それは、和語（やまとことば）を中心にひらがなで書かれた和文体と漢語や漢文の要素とが融合した「和漢混淆文」と呼ばれる文体ができたことです（「混淆」というのは、「まぜこぜ」ということです）。

漢文はもともと中国から入ってきた外国語の文章で、語順なども日本語とは異なります。昔の日本の人たちは、それを日本語として意味が通るように順番を入れ替えながら読み下していく「訓読」という方法を編み出しました。平安時代の頃は、漢文は政治や学問を行うための公式の言語で、漢文を訓読した文章も、日本語として読んでいるとはいえ、普段使いの和文の言葉とは異なるスタイル。私的なやりとりをするために使う和文（当時の話し言葉に近いのはこちらです）と交わることはありませんでした。しかし鎌倉時代以降、両方の要素が一つの文体の中で使われるようになります。

それぞれ実際にどんな文体だったのでしょうか。

平安時代の和文の代表として「源氏物語」の冒頭を見てみましょう。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれてときめき給ふ有りけり。

（「源氏物語」桐壺）

和語（やまとことば）が多く使われていて、ひらがなが多いですね。省略も多いし、「に」「が」といった助詞を介してぬるぬると文が続いていくところが、読みにくいと感じる人も多いのではないのでしょうか。

次に、鎌倉時代の和漢混淆文の作品を見てみましょう。こちらの代表選手は、「平家物語」などの軍記物。こちらにも有名な冒頭部分を見えます。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

（「平家物語」祇園精舎）

漢字で書かれた漢語がたくさんありますね。「ゝのごとし」「ゝに同じ」などの言い回しも漢文を訓読する時によく出てくる形です。比較的短い文がサクサクと続いて、先に示した和文の例と比べると、かなり読みやすく感じるのではないかと思います。声に出して読んでみるとその違いはいつそう明らかです。

実は、明治時代の文語文も、現在わたしたちが用いる口語の漢字かな交じり文も、大きく言えば和漢混淆文の子孫です。ですから、和漢混淆文で書かれている「平家物語」は、和文体の「源氏物語」に比べると、今のわたしたちにとってもずっと読みやすくわかりやすいのです。

そういうわけで、この鎌倉時代以降の和漢混淆文体の古文が、まだ文語文が普通に使われていた明治時代前半には、文章のお手本として教えられていました。

同様に、漢文そのものも文語文の上達に不可欠なものでした。なぜなら、文語文には漢語・漢文の要素がたくさん含まれていますし、日本人が漢文で書く（つまり、漢字だけを使い中国語の文法に従って書く）こともありましたから、古文だけでなく漢文もあわせて学ぶことが、日本語の読み書きを上達させるため直接的に役に立っていたのです。

ところが、やがて全国共通の話言葉が模索され、文章の方も「話すように書く」ようになっていきます。「言文一致」ですね。言文一致が達成され、話すように書くことができるようになると、今度は古文と現代文の間に距離が生じてきます。こうなると、古文や漢文は作文のお手本にはなりません。その代わりに、歴史的な価値を持つ「古典」として、「国民性の涵養」のために学ばれるようになります。

なぜ古典を学ぶことが「国民性」を育てることになるのでしょうか。それは、古典を読むことを通じて、わたしたちが共通の文化

的ルーツを持っていると信じられるようになるからです。「源氏物語」や「枕草子」^{まくらそうし}、「平家物語」や「徒然草」^{つれづれ草}を書いたのは、わたしたちと同じこの土地に住んで日本語を使っていた人たちで、漢文で「論語」や「史記」を読んでもいた。今のわたしたちもそれを読んで理解し、共感することができる。そういうストーリーですね。^⑥一種のフィクションなのですが、この感覚が、わたしたちを共同体のメンバーとして結びつけます。

現代文であっても、いわゆる「定番教材」「国民教材」と呼ばれるような作品は、古典と同じように、読者を共同体のメンバーとして結びつける働きをします。たとえば、「ごんぎつね」や「走れメロス」、「羅生門」^{らしょうもん}に「山月記」といった作品は、多くの教科書に載っていて多くの学校で教えられています。ほかの学校の友だちとも、同じ作品の話で盛り上がるすることができます。しかも、これらの作品は定番となつてから時間が経っていますので、おそらくみなさんのお父さんやお母さんの世代も学校で習っています。「ごん、お前だったのか」とか「メロスは激怒した」^{げきど}とか、印象的なこれらの文がSNSなどでネタとして使われたりするのも、世代を問わずみんなが知っているからです。そんなふうに、横のつながりだけでなく、縦のつながりも感じられるのは、うれしく楽しいことですよ。

このようなつながりの感覚は、国家主義・植民地主義などと結びつけば、その外側にいる人たちを排除したり抑圧したりする危険性もはらんでいます。実際、戦前の国語教育が目指した「国民性の涵養」は、戦争に続いていくものでもありました。

しかし、「同じものを読む」ということを通して他者とながら感覚それ自体は、決して悪いものではありません。古文や漢文の学びは、日本語共同体、さらには東アジアの漢字文化圏^{ぶんかけん}での連帯を作り出します。その連帯は、国家の枠^{わく}に収まりきるものではありません。もっと言えば、人類に共有される文化遺産として、世界文学の一端^{いったん}を占めるものもあります。わたしたちがシェイクスピアを知っているように、「源氏物語」を知っているイギリス人もいます。^⑦

古典を学ぶことが作り出すつながりには、わたしたちが思う以上の可能性が秘められているのではないでしょう。

現在、国語の内容を規定する学習指導要領では、古典を学ぶ意義や目的として「国民性」という言い方はしていません。そこで言

われているのは、「伝統的な言語文化」を継承けいしょうするということです。今まで読み継つがれてきた作品をこれからも読み継いでいくこと。それも、なるべく当時と近い形で読めるようにすること。そのために必要最低限の文法を学ぶことが示されています。

よく考えてみると、古典で読まれる作品というのは、明治時代に近代的な国家という枠組わくぐみみができるよりも前に書かれています。学校で読む古典は、学習指導要領や教科書検定という国の制度を通して決まっていますが、その枠の中でおとなしくしていなければいけないという道理はありません。自分にとっての古典が何かというのは自分で決めていいのです。

教科書に載らない（載せられない）作品の中にも面白いおもしろものはたくさんあります。また、文学作品以外にも、地震じしんや天文の研究に使われる古文書や、ひいおじいさん・ひいおばあさんの日記や手紙なども、日本語共同体が持つ文字の遺産です。自分がつながりを感じられるような作品を自分で探すために古文や漢文を読む力をつけるというのも、意義あることだと思います。

【問1】

——①「大きく見取り図を描いてみる」とありますが、どういことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 細かいところまでは気にせずに、全体像を把握しようとする、ということ。
- (イ) よく言われている事柄にとらわれず、常識を覆そうとする、ということ。
（こじがら）
- (ウ) 様々な角度から調べ、細かい部分まで明らかにしようとする、ということ。
- (エ) うまくいくか分からないが、あるべき姿を取り戻そうとする、ということ。
（もと）

【問2】

——②「その表紙にある『国語』というタイトルを疑ったことはありませんでした」とありますが、どういことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 「国語」というありふれた教科名より、もっと適切な名称があるとは少しも考えなかったということ。
（めいしょう）
- (イ) 「国語」は学校で勉強するすべての教科の中で、とりわけ重要な教科だと思い込んでいたということ。
（おも）
- (ウ) 「国語」と表紙に書かれていれば、どんなものでも「国語」の教科書なのだと信じていたということ。
- (エ) 「国語」という教科で日本語を勉強するのは当たり前で、違和感を覚えたこともなかったということ。
（い）（わかん）

【問3】

A

に当てはまる語句として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 個人の言葉と国家の言葉は違うということ。
- (イ) 個々人が国家の言葉を決定するということ。
- (ウ) 「国語」と国家の言葉は別のものだということ。
- (エ) 「国語」は国家の言葉に限定されないということ。

【問4】

—— ③「実はアメル先生こそが、アルザスの人たちに自分たちの言葉（アルザス語）とは違う言葉（フランス語）を押しつける立場だったのです」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) アメル先生は自身の信念に基づき、アルザスの人たちの第一言語をフランス語にするために試行錯誤を重ねてきたが、アルザスの人たちはそれを望んでいなかったということ。
- (イ) アメル先生たちがフランス語の使用を強制したことにより、アルザス語の尊厳を傷つけられたとして、フランス少年らアルザスの人たちの反発心が強まってしまったということ。
- (ウ) アメル先生は自身の職業的使命に従って、フランス語の素晴らしさを力説したが、そのフランス語とは、アルザスの人たちの生活に根ざした言語では決してなかったということ。
- (エ) アメル先生はアルザスの人たちにフランス語を教え込むという自分の役割を果たそうとするあまり、手段を選ばず、アルザス語をフランス語風に改変しようとしたということ。

【問5】

——④「はたしてそれを『自分の言葉』と言えるのでしょうか」とありますが、「自分の言葉」に関して説明した次の文章を読んで、(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

フランツ少年にとって「自分の言葉」とは何だったのでしょうか。「最後の授業」の中でアメル先生は、

- (1) (ア) 日常の言葉とは、ときにそれを使う人をろう獄に閉じ込めるもの
(イ) 「自分の言葉」とは、その人が生まれて最初に覚える言語のこと
(ウ) 言葉とは、自分自身を見失わないようにする手がかりとなるもの

であると説いています。

このとき、アメル先生が念頭に置いていた守るべき「自分たちの言葉」はフランス語でした。しかし、アルザス地方

に住むフランツ少年にとってフランス語とは(2)

- (エ) 世界でいちばん美しく力強い言語
(オ) 努力しなければ身につかない言語
(カ) 愛国心や郷土愛をかき立てる言語

でした。

一方、筆者の意見を踏まえれば、「自分の言葉」とは、

- (3) (キ) 生まれて最初に覚える言語であり、あらゆる思考のもとになるもの
(ク) その人の経験を反映した言語であり、個人の独自性を引き出すもの
(ケ) 愛国心を育む言語であり、自分たちの国を守っていく盾となるもの

であるはずです。

やはり、フランツ少年にとって、

- (4) (コ) 「自分の言葉が奪われる」可能性は、もともと無かった
(サ) 「ろう獄のかぎを握っている」のは、アメル先生だった
(シ) 「自分を解放するかぎ」とは、フランス語ではなかった

ということになるでしょう。

【問6】

B に当てはまる四字熟語として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 十年一日 (イ) 一朝一夕 (ウ) 千載一遇 (エ) 一日千秋

【問7】

C ～ F に当てはまる語の組み合わせとして適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) [C] とはいえー [D] こうしてー [E] たとえばー [F] もちろん
 (イ) [C] とはいえー [D] たとえばー [E] こうしてー [F] もちろん
 (ウ) [C] もちろんー [D] とはいえー [E] たとえばー [F] こうして
 (エ) [C] もちろんー [D] たとえばー [E] とはいえー [F] こうして

【問8】

—— ⑤ 「話し言葉に書き言葉を近づけた結果、今のわたしたちは古文との接点を失ってしまったというわけです」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 「言文一致」により、時代とともに乱れてきた古典文法も正式なものとなされ、くだけた言葉遣いが正当化された、ということ。
 (イ) 「言文一致」の結果、古文に触れる機会がほとんどなくなり、古典作品の持つ文化的価値すらも見失われてしまった、ということ。

- (ウ) 「言文一致」をうけて、話すように書くということができるようになって、日常生活において古文を使わなくなった、ということ。

- (エ) 「言文一致」後は、国語の授業で古文や漢文を学ぶ意義がわかりにくくなり、学生たちの興味関心が薄れてしまった、ということ。

【問9】

——⑥「一種のフィクションなのですが、この感覚が、わたしたちを共同体のメンバーとして結びつけます」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、a d に当てはまるものを選び、それぞれ（ア）（イ）（ク）の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

明治時代ごろまで、古文・漢文は書き言葉のお手本になるというa 的な役割を持っていました。しかし、「言文一致」が起こると状況は変わります。古文・漢文は、「古典」という新たな形で学ばれるようになった、と筆者は言います。

はるか昔の日本人が書き、これまで脈々と読み継がれてきた『源氏物語』や『平家物語』などの「古典」。そこにあらわれたものの見方・考え方は、あらたな世代の日本人も理解することができるし、またb していくべきである。このような考え方のもと、特に学校という場で、「古典」は日本人という「国民」の精神性を育成するものとして学ばれることとなりました。

実際のところ、明治時代に至るまで、『源氏物語』や『平家物語』をあまねく多くの人々が読んでいたとは言いがたいですし、共通の「国民性」とは何なのか、よくわからないことも事実です。「古典」を通した「国民性」の育成というものが、近代に入って作り上げられたc のストーリーである、と筆者が言う理由もこのあたりにあります。

しかし一方で、教科書にかならず掲載されているような定番の作品によって、多くの世代・地域の人々が同じ作品を読む、という体験の共通性が生まれていきます。この共通性は、同じ集団・共同体の中にあるという、人々の

d 意識のもとになっていると、筆者は指摘して（しで）もいるのです。

- (ア) 変容 (イ) 実用 (ウ) 虚構きようこう (エ) 改革
 (オ) 帰属 (カ) 消極 (キ) 欲望 (ク) 継承

【問10】

—— ⑦ 「古典を学ぶことが作り出すつながりには、わたしたちが思う以上の可能性が秘められているのではないでしょうか」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、a d に当てはまるものを選び、それぞれ (ア) ～ (ク) の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

筆者がいうように、学校で古典や有名な作品などの「同じものを読む」ということは、世代を超こえて a 働きをもちます。この働きを利用して、アジア・太平洋戦争に向かう時期など、かつての「国語」教育においては、国民の一体感を高めようとした、という歴史が日本にもありました。「最後の授業」のアメル先生がアルザス地方のフランス少年たちにフランス語を教え込もうとしたように、当時の日本が、占領せんりょうしていた地域の人々に対しても、

b など、まさに国家の言葉として機能してきたのです。

しかし、「同じものを読む」ということにおいて、c 必要はない、と筆者はいいます。古文や漢文を読み学ぶことは、国境を越こえた他者との結びつきを生み出すきっかけにもなるのです。その意味で、シェイクスピアの作品も『源氏物語』も、まさに古典的文学だと言えるのです。

現在の私たちの視点から、古典を読む意義を新たに見出すことみいだの重要性を筆者は指摘しています。たとえば、昨年のNHK大河ドラマ「光る君へ」は、『源氏物語』とその作者紫式部むすめしきぶの人生を今改めて読み直す試みだったといえますし、多くの人が『源氏物語』の世界にふれるきっかけともなりました。中学校や高校では「国語」という教科で、古文や漢文を学んでいくこととなります。私たち一人ひとりが d ためにも、「伝統的な言語文化」を学び、受

け継いでいく必要があるのです。

- (ア) 過去の過^{あやま}ちを反省し未来に活かす
- (イ) 一つの共同体の結びつきを強める
- (ウ) 新たな定番作品を作り出していく
- (エ) それぞれにとっての古典を見出す

- (オ) 必要最低限の文法を学んでいく
- (カ) 日本語を「国語」として押^おし付ける
- (キ) 「国家」という枠組みを前提とする
- (ク) 「国語」と日本語とを区別する

【問11】

次の選^{せん}択^{たく}肢^しについて、本文の内容や筆者の意見と合^が致^ちするものは「○」、合^が致^ちしないものは「×」の記号で答えなさい。

- (ア) 人間が習得する言語は各個人の生育環境によって決まるものであり、国家の言葉である国語とは必ずしも一致しない。
- (イ) 「言文一致」が達成され、古文と現代文との間に距離^がが生じた後は、古文・漢文は書き言葉の手本とはされなくなった。
- (ウ) 『源氏物語』などの作品に代表される和文体は、その読みづらさにより平安時代の読者からも敬遠^{あつか}されるものであった。
- (エ) 科学に関する古文書や昔の日記などは、文学作品と呼ぶことができないため、「古典」として扱^{あつか}うことは不可能である。

【出典】

- Ⅰ 角田光代「ミツザワ書店」『さがしもの』（新潮社、二〇〇八年）一四三～一六六頁。
- Ⅱ 仲島ひとみ「言葉の地図を手にいれる」『国語をめぐる冒険』（岩波ジュニア新書、二〇二二年）一八四～二〇六頁。

※ただし、問題作成の都合上、一部省略したところがある。